



Title	現代デンマーク語における鼻子音の前の短母音
Author(s)	間瀬, 英夫
Citation	IDUN. 1992, 10, p. 139-158
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95828
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

現代デンマーク語における 鼻子音の前の短母音

間瀬 英夫

1.1. 序

本論では「母音(字)+鼻子音(字)」の正音学のおよび音韻的關係を検討する。デンマーク語(以下、「デ語」と略す)の母音字は、他の多くの言語におけると同様に、長母音字と短母音字の区別はないが、以下で「母音字」とするものは短母音を示す場合の母音字と理解されたい。

デ語の短母音は通時的に見ると、種々の音環境で絶え間なく広口化してきたが、母音を示す字母・綴り字の改変の方は15世紀初頭以来ほとんど行われていないため(Aa. Hansen 1962: 16ff. 参照)、全体的に言えば、狭口・半狭口短母音は各々字母より一段広口の音声記号で示される音価をもつところとなった。このうちでも、鼻子音の前の短母音の広口化はとくに顕著である。表1に示す Becker-Christensen 1988 (以下、BC と略す)の現代デ語のデータ(BC: 119ff.)はその歴史的事実を如実に示す。ただし BC のデータは数字の誤りがあるので、表1は BC: 120, 256ff. の語彙データに基づいて訂正した。さらに、BC: 124 の表から、字母〈e〉が[α]となる87語、字母〈ø〉が[ɔ]となる54語は除外した。その理由は、[α]は /a/ の変異音であること、字母〈ø〉が[ɔ]となるのは広口化とは別種の音変化であることである。なお、以下の表では音節頭子音は /r/ および無子音もすべて含む。音声記号は Dania を一部修正したものである(詳細は拙論(間瀬 1990)を参照されたい)。

表 1 : 非鼻子音字および鼻子音字の前の母音字とその音価:

頻度数 (単語数) (BC: 124)

音価	[i]	[e]	[æ]	[y]	[ø]	[ö]	[u]	[o]	[å]	[ɔ]
字母	i	i e	e æ	y	y ø	ø	u	o	u o	o å
- X	293	120 73	218 249	122	38 106	51	203	52	76 21	293 33
- N	11	136 6	99 66	(3)	40 12	30	5	0	117 18	64 5
合	304	256 79	317 315	125	78 118	81	208	52	193 39	357 38
計	304	335	632	125	196	81	208	52	232	395

- X = 非鼻子音字, - N = 鼻子音字.

1.2. 短母音音素

ここで, 以下の議論に関係する短母音音素とその変異音の分布を示しておく. デ語の短母音は標準環境 (X __ X) で次のような対立がある. (X = R および N 以外; R = 同一音節中の /r/, N = 音節末鼻子音.)

/i/ [i] mit	/y/ [y] tysk	/u/ [u] kup
/e/ [e] midt	/ø/ [ø] kyst, øst	/o/ [å] skub
/æ/ [æ] mæt, let		/å/ [ɔ] kop

音節頭 /r/ の後で /i, y, u/, /å/ は影響を受けないが, /e/, /æ/, /ø/ は各々 1 段広口の変異音で実現される.

/i/ [i] rids	/y/ [y] kryds	/u/ [u] trup
/e/ [æ] frisk	/ø/ [ö]{ bryst brøst	/o/ [å] rub
/æ/ [a]{ rest præst		/å/ [ɔ]{ trop råbt

以下では, たとえば R[æ] (または [Ræ]) のような表記は「音節頭 /r/ の後では [æ] となる」と読む.

音節末 /r/ の前では /e/ と /æ/ は中和し, 両者とも [å] で実現される: /i/ ir [iɹ]; /e, æ/ er [åɹ], bær [båɹ]. /å/ は

後続の /r/ と融合して全体で [å(:)] となる (kors [kå:s], tårn [tå'n], vor [vå]). このほかに, 短母音として /a/ があるが, 本論の主旨には関係しないので省略する. また, 表 1 の [o] は /o/ の変異音であるが, これは開音節 (現実には外来語) に現れるもので, 本論の主旨には関係しないので, 以下では対象としない.

2.1. 鼻子音環境の短母音 - BC のデータの検討

表 1 のうちの「母音字 + 鼻子音字」のデータを取り出し, 後続の鼻子音 (字) によって分けてみる. 字母 <n> には <ng> も含まれる.

表 2: 鼻子音字の前の短母音の音価: 頻度数 (単語数) (BC: 124)

	[i]	[e]	[æ]	[y]	[ø]	[ö]	[u]	[å]	[o]
母	i	i e	e æ	y	y ø	ø	u	u o	o å
-m	3	29 1	36 17	(1)	8 -	12	-	51 10	27 -
-n	8	107 5	63 49	(2)	32 12	18	5	66 8	37 5
合	11	136 6	99 66	(3)	40 12	30	5	117 18	64 5
計	11	142	165	(3)	52	30	5	135	69

表 2 からわかるように, 字母と音声記号が一致する語, すなわち「広口化」が適用されない語はごく少数である.

BC の記述は字母と発音の関係, すなわち正音学的関係であって, 純粹に音韻論的なものではない. そこで, BC の示す語を音韻論の見地から検討してみる. 発音形については, 近年刊行された Brink *et al.* 1991 (以下, SD と略す) および Molbæk Hansen 1990 (以下, MH と略す) の 2 点の発音辞典に準拠する. SD は種々の世代の発音形を記述しているが, そのうちの基準世代 (1930 年頃生まれ) より若い世代を “yngre” と呼んでいるが, これは “unge” と呼ばれる

若い世代とは区別されているが、正確な世代区分は不明である。本論ではこれらをそのまま“yngre”, “unge”と呼ぶことにする。

問題は、BC の示す語形において音節境界が鼻子音(字)の前にあるか後にあるかである。そこで、「鼻子音(字)は、短母音(字)と同一音節中に現れるとき、すなわち音節末に立つときにのみ短母音(字)に影響を与え、母音を標準環境の変異音より一段広口の音価に変える(字母より一段広口の音声記号に変える)」という仮説を基にして、広口化しない場合を「例外」として検討していくことにする。(BC の語例中の、たとえば [i] のほかに「[e] もある」場合、[e] は [e] で示される。また、綴り字中の ' および ' は各々第1および第2強勢を、アポストロフィは stød を示す; <-m>, <-n> は当該母音字が各々 <m>, <n> の前にくるところを示す。)

BC は <i>=[i] のうちに 'primiti'v, 'primæ'r (233), 'finish, 'mini, -'INI: (例: bi'kini [bi'ki(:)ni]), -'INIT+I'V (例: de'finiti'v), -'INUT+I'V (例: di'minuti'v) (235), また <e>=[e] のうちに 'femi'ni'n (233) を加えている。これらの語形は完全母音を含む音節を複数個もつという点で典型的外来語である。これらの語の音節境界は、たとえば 'pri+mi+tiv, 'pri+mær と解釈すべきである (+ は音節境界を示す; 以下同様)。primær は SD, MH では 'pri,mæ'r のように第2強勢が示されるばかりではなく、強勢位置の異なる pri'mær' もあり(とくに、年配の世代で)、この場合には音節境界は <i> と <m> の間にあることは明らかである。これらの場合の鼻子音字は <i> の関与的環境にないことになり、<i> は当然 [i] となる。つまり、上述の仮説には関係しないので、例外とはならない。同様に、'mi+ni-, bi+'ki+ni, de+'fi+ni+ti'v, di+'mi+nu+ti'v, 'fi+nish, 'fe+mi+'ni'n の音節境界は当該鼻子音の前と解釈する。この型の外来語はこのほかにも多数ある。たとえば di+men+'sio'n, di+mi+nu+'endo, fi+'nan's, 'do+mi+no ['do:mino],

e+ner+'gi', ke+'mi', ge+ne+'ra'l. BC がなぜ <im> のうちに primitiv, primær の 2 語のみを, のうちに feminin の 1 語のみを加えたのかその理由は不明である. また, feminin の <e> を考慮しながら, 次音節の <i> は無視している. 以下では, これらの型の語は関与的鼻子音環境にはないことになるので, 検討の対象から外す. (したがって, 表 2 の <-im> の 3 語は 1 語に, <-in> の 8 語は 3 語に減少し, <-em> の 1 語はなくなる.)

BC の語彙で, 字母と音声記号が一致するとされる語は次の通り.

(1) <i>= [i]:

(1a) <-m>: 'trimle [/Ræ] (233);

(1b) <-n>: 'linje/'linie (両者とも [linjə]), 'trin,
'trind [/Ræ] (235).

trimle の <i> は閉音節に現れている (音節頭では <ml->, /ml-/ は不可). trimle および (1b) の trind は MH では [æ] (=R[æ]) のみであるが, SD ではこのほか [i] も可能であるとする (trimle の [i] は “yngre” の話者で). したがって, これらの 2 語では [æ] が標準形であるが, [i] も一応認められるとすべきであろう.

linje, trin の <i>= [i] は例外を成す. <nj>, /nj/ の子音結合は音節頭でも音節末でも認めにくいので, lin+je と音節分けされよう (li+nje なら <i> は関与的環境にないことになる).

合成形における短音化形は別にして, BC は示していないが, (1) の型の語で例外となる語が 2 個ある. すなわち pinje [pinjə] および pinsel [pi:'nsəl, pin'səl] (長母音形の方がより一般的).

この結果, (1a)と(1b)で「例外」となるのは, trimle, linje, trin, trind, pinje, pinsel の 6 語となる.

(2) <e>= [e]:

(2a) <-m>: なし;

(2b) <-n>: 'hende, 'end [/æ], 'fjende [/æ], 'sennep [/æ],
'ren'sdy'r [/Ra] (235)

(2b)の語で [e] となる場合は正音学的には例外となる。このうち, hende [henə] 以外の end, fjende, sennep は [æ] もあり, この [æ] は例外ではない。sennep は MH では [e] しか示されていないが, SD では [e], [æ] の両形が記述されている。

rensdyr は MH にはないが, SD によれば ['ran's_idyːɹ] である ([a]=R[a]←/æ/). したがって, BC の狭口変異音は標準形ではない。また, これは一種の合成形であるので, ここでの議論には関与的ではない。合成形における母音音長変化は別に扱うべき現象なので, 以下では rensdyr は対象としない。(この結果, (2b) <e>=[e] の例外は上記の4語となる。)

(3) <y>=[y]:

(3a) <-m>: 'hymne [/ø];

(3b) <-n>: 'brynje [/Rö], 'synes [/y:] (256f.).

このほか, 表1には含まれていないが, <y>=[y] に関し, BC: 130 は音節末鼻子音(字)の前に現れるものとして, 次のような一定の型の外来語を示す。

(3c) gymna'stik, sym'bo'l, syn'kro'n, syn'tese, etc.

しかし, olympi'ade, o'lym'pisk などの <y> は [ø] となる。これについては §3.3 の末部で述べる。

hymne の [ø] は少数の話者にのみ認められる (SD)。brynje は [ö] (=R[ö]) も可能である (SD)。MH では両者とも [y] しか認めていない。両語とも [y] なら例外となる。synes は, SD によれば, <…のようだ, …のように見える> のときは長母音の ['sy:nəs], <思う, 感じる> では短母音の ['syns] となる。MH は意味の区別は行わず, ['synəs, 'syn's] の短母音形のみを示している。この

[y] は例外となる。

このほか、BC にはないが、lynne と lynche がある。lynne は [lynə] であるが、SD は年配の世代では [ø] も可能であるとする。lynche は SD では [lønʃə, lynʃə] (+[-ntʃə]), MH では [lenʃə, lynʃə, lønʃə] と記述されている。これらの発音形のうち、[y] は例外となる ([lenʃə] の [e] は外国語的発音形で、別種の例外的発音形である)。これら [y] をもつ語は synes を除いて、すべて新・旧外来語であると言われる (lynne はスウェーデン語から)。

(3c) は olympiade, olympisk を除き、例外となる。

(4) <ø> = [ø]/R[ö]:

(4a) <-m>: なし;

(4b) <-n>: 'mønje, 'møn'ster, 'møn't, 'pønse, 'ønske, 'sønden- <南の> (たとえば 'sønden|vin'd), 'søndre <南の>; <粉碎する>, 'sønder <南の>; <ばらばら・こなごなに> (同様に, たとえば 'sønder|ri've <引き裂く>), 'tønde; 'drøn'nert [/Rö], 'frønnet [/Rö], 'krøn'ike, 'brønd [/Rö] (257).

(4) (= (4b) の mønje から tønde までの語は正音学的には例外となる。(ただし, これらの [ø] は mønt を除き, “yngre” および地方の話者では [ö] もあると SD は記述する。)

drønnert は SD では [ö] のほかに [ø] も認めるのに対し, MH では [ö] しか認めていないが, 両形を認めるべきであろう。frønnet は [ö] であるが, SD は [ø] もありうるとする。krønike は BC: 257 では [ö] のみが見られているが, SD, MH では [ö, ø] の両形が見られている。brønd は SD, MH とも [ö] のみであるので, これを基準とし, 以下では例外ではないとする (SD によれば, [ö] は少数の年配者とユトランドの話者に見られるのみである。)

上記の(4b)の語のほかに、〈ø〉が[ø]となる語として dønne, dønning, mønning がある。SD によれば、dønning は[ö]も可能で、mønning は“yngre”の話者では[ö]もあるとする。この結果、dønne, dønning, mønning, drønnert, frønnet, krønike の狭口の発音形(=[ø]/R[ö])が正音学的には例外となる。

(5) 〈u〉=[u]:

(5a) 〈-m〉: なし;

(5b) 〈-n〉: 'hun, 'hun'd, 'hundrede, 'kunne, 'pun'd (278).

これらの5個の語は例外である。

(6) 〈o〉=[å]:

(6a) 〈-m〉: 'bom', 'bombe, 'bom'mert, (275), 'brom|bær,

'plombe, 'pom'p [/ɔ], 'tromle, 'tromme;

'kompagnon [/ɔ]; -'OMME: 例: karde'momme (277);

(6b) 〈-n〉: 'bonde, 'mon, 'on'd, 'on'kel, 'on'sdag,

'don|kraft [/ɔ], 'monstrum [/ɔ], vaga'bon'd [/ɔ] (279).

(6) の語もすべて正音学的には例外である。しかし、一部の語の[ɔ]となる場合は例外ではない。

(6a) の 'kompagnon が[å/ɔ]となることを BC は述べているが、このほかにも、弱強勢または強強勢の kom- で始まる外来語が多数ある。これらは発音が一定ではなく、[å]になったり、[ɔ]になったりすると思われる。たとえば kombinere は MH では[kombi-'ne:ɔ]しか示されていないが、SD では標準形を[kåmbi-'ne:ɔ]とし、このほか[kom-]もありとし、さらに“yngre”の話者(とくにユトランド、フューン)では[kom-]もあるとする。この型の外来語の音声表記は MH と SD ではかなり相違があり、発音形は一定していないようなので、本論では未解決のままにおく。

2.2. 「例外」となる語

以上の BC のデータを正音学的「例外」として整理し直してみると、以下ようになる。(語の第1音節に強強勢があるときは強勢記号を省略する.)

(7-1) 前舌非円唇母音:

[i]: linje, pinje, trin;

[i]/[i:] ([i:]の方がより一般的): pinsel [pi'nsəl, pin'səl];

[æ] (/ [i]) ([æ] (= R[æ]) が標準): trimle, trin'd;

[e]: hende [henə];

[e]/[æ] ([e] がふつう): end, fjende, sennep.

(7-2) 前舌円唇母音:

[y]/[y:]: synes [synⁿs], [sy:nəs];

[y] (/ [ø/Rö]) ([y] が標準): hymne, brynje;

[y] (/ [ø]) ([ø] は年配者のみ): lynne;

[y]/[ø]: lynche;

[ø]: mønje, møn'ster, møn't, pønse, tønne, tøn'der, ønske,
søndre (同様に sønden(-), sønder(-));

[ø] (/ [ö]): dønne, dønning, mønning;

R[ö]/R[ö]: drøn'nert, frønnet, krøn'ike;

gymna'stik, sym'bol などの [y] については後述する (§ 3.3).

(7-3) 後舌母音:

[u]: hun, hun'd, hundrede, kunne, pun'd;

[å]: bom', bombe, bom'mert, brombær, karde'momme,
plombe, tromle, tromme;

bonde, mon, on'd, on'kel, on'sdag;

[å]/[ɔ]: pom'p; donkraft, monstrum, vaga'bon'd.

前舌円唇母音は、表2の訂正と後述の議論に必要なので、以下に「例外」ではない語形を提示する。同音異義語（品詞の相違も含む）は1語として扱う。共時的に派生語と意識される語は代表形のみ示す。語彙は以下の議論の都合上鼻子音後の子音字によって分類表示する。〈nd〉の語のうちで〈d〉が[d]として発音される語にはその右肩に*を付す。語の右肩の数字はSDの次の記述を意味する。

1: とくに“unge”および地方では [ø]→[ö], [ö]→[õ]

2: とくに“yngre”および地方では [ø]→[ö], [ö]→[õ]

(7-4) 〈y〉=[ø]/R[ö]:

krym'mel; krympe, stym^oper¹; lymfe, nymfe; ymte;
bekym're¹;
nynne¹; synftig; mynte, pyn't¹, gryn't; be'gyn'de¹,
dyn'd, flynder¹, for'kyn'de¹, fynd¹ (fyndig*), hynde¹,
kyndig*¹, mynde, myndig*, myndling², plyndre¹, skynde¹,
syn'd² (syndig*²), syn^oderlig², tynd¹, ynde (yndig*);
frynse; bynke, klynke, synke, yn'k, rynke; dynge, gyngre,
klynge, lyn'g, slynge, slyn'gel, syngre, tyn'gde, yngre,
yngel, yngling.

(7-5) 〈ø〉=[ö]/R[ö]:

be'røm'me, drøm', dømme, for'søm'me, løm'mel, strøm',
svømme, søm', tømme, tøm'mer, rømme, øm'; strømpe;
skrøm't;
bøn', bønne, grøn', høn'nike, køn', løn', røn', rønne,
skøn', stønne, søn'dag, søn; skøn't, røn'tgen; brøn'd,
brøn'dsel, bøn'der; høn's, hønse.

以上の調査結果から、表 2 の語数を修正し、表 3 に変える。2 個の異なる発音形がある場合には、(7-2) の丸括弧に包んである発音形を除き、各々の発音形を 1 個として計算してある（つまり、1 語が二重に計算されているものがある）。ただし、SD の “yngre”, “unge” などは、B-C のデータとの関係で考慮していない。

表 3：子音環境の短母音(字)の音価：頻度数（単語数）

	[i]	[e]	[æ]	[y]	[ø]	[ö]	[u]	[å]	[o]
字母	i	i e	e æ	y	y ø	ø	u	u o	o å
-m	1	30 0	36 17	1	7 0	14	0	51 9	27 0
-n	5	109 4	63 49	4	38 14	19	5	66 8	37 5
合	6	139 4	99 66	5	45 14	33	5	117 17	64 5
計	6	143	165	5	59	33	5	134	69

3. 音韻解釈

3.1. 「例外」の処理の仕方

鼻子音環境における発音形の数 は次の通りである。（/r/ の後の変異音も含む。[e], [æ], [ø], [ö] は /r/ の後では各々一段広口の [æ], [a], [ö], [ø] となる。この R 環境の変異音は後の規則で処理できるので、以下では標準環境の変異音と一括して扱う。）

[i]	6	[y]	5	[u]	5
[e]	143	[ø]	59	[å]	134
[æ]	165	[ö]	33	[o]	69

「例外」となる語数は、広口化形が標準形であるものも含め、[i]=6, [y]=5, [u]=5 にしかすぎない。

この数字は §1.1 の表 1 の非鼻子音環境における変異音の分布と大いに異なる。§1.2 で示したように、標準環境では /i, e, æ/,

/y, ø/, /u, o, å/ の対立がある．それゆえ，これらの狭口短母音状音を各々 /i/, /y/, /u/ の広口化しない例外的発音形とみなし，鼻子音環境での発音形は次のように導かれる（派生する）とすることとは可能である．すなわち

解釈 A： (/ の右側は R 環境の変異音)

[i] ← /i/ (例外)	[y] ← /y/ (例外)	[u] ← /u/ (例外)
[e/æ] ← /i/	[ø/ö] ← /y/	[å] ← /u/
[æ/a] ← /e, æ/	[ö/ö] ← /ø/	[o] ← /o, å/

この解釈の場合，/e/ と /æ/ および /o/ と /å/ は中和することになる．

一方，発音形の頻度の分布は考慮せず（例外を認めず），各々の音声形に対応の音素を設定すると，次のようになる．

解釈 B：

[i] ← /i/	[y] ← /y/	[u] ← /u/
[e/æ] ← /e/	[ø/ö] ← /ø/	[å] ← /o/
[æ/a] ← /æ/	[ö/ö] ← /ö/	[o] ← /å/

この解釈 B をとっても，前舌非円唇の /i, e, æ/ および 後舌の /u, o, å/ では音素数は増加しない．これに対し，前舌円唇短母音は音素数に関係する．前舌円唇短母音は鼻子音環境以外ではその対立が 2 個以上になることはない．それゆえ，もし [y], [ø], [ö] を各々別の音素，すなわち，/y/, /ø/, /ö/ の実現形であるとする，この環境においてのみ 3 個の音素を設定しなくてはならない．この解釈が妥当かどうかを検討してみるが，それどころか，鼻子音環境における前舌円唇短母音は 1 個しかないという説もあるので，先ずこの後者の解釈の妥当性を次節で検討してみる．

3.2. 原音素としての /Y/

Basbøll 1971; 1972a; 1972b, Hjelmslev 1951 などには「鼻子音

環境での前舌円唇短母音音素は舌の高さに関して音韻的対立がなく、原音素（あるいは基底セグメント）/Y/ を1個認めればよい」と言う。この解釈によると、「/Y/+ 鼻子音」後の音節末にさらに鼻子音がくるか非鼻子音がくるかによって /Y/ がどのように実現されるかが決まる。すなわち（Basbøll 1972b: 208; 1971: 190）:

- (1) søn /sYn/ [sön]
- (2) synd /sYnd/ [søn']
- (3) grynt /grYnt/ [grön'd]
- (4) grønt /grYnnt/ [grön'd]
- (5) skynd /sgYnd/ [sgøn']
- (6) skøn /sgYnn/ [sgön']

((3), (4)の [ö], [ö] は /r/ の影響によって広口化したもの。

この /r/ の影響は後の規則による。)

この解釈の最大の目的は前舌円唇短母音を /Y/ 1個に還元させることではなく、stød を導く（派生させる）ことにある。Stød を導く一般規則の一つとして「1音節語(音節)末に現れる [sonorant] の子音は、さらに別の子音に後続されるなら、stød をとる」という規則を設定することができる（Basbøll 1972b, 間瀬 1976 など参照）。(1)に stød がないのは音節末子音が /n/ 1個であるためで、その他の(2)以下に stød が起こるのは /n/ の後にさらに子音が後続するためであるとする。

(3)と(4), (5)と(6)の [ø]/(R[ö]) と [ö]/(R[ö]) の相違は音節末第2子音が非鼻子音か鼻子音かによるという。すなわち、第1鼻子音 /n/ の後に非鼻子音がくれば [ø]/R[ö], さもなければ [ö]/R[ö] となる。

(2)の末尾子音として /d/ が設定されるわけは、synd の派生形容詞 syndig [søndi] に [d] が現れるためである (synd の <d> /d/ は音節末の [sonorant] 子音の後では無音で実現するとされる)。

この /Y/ という1個の原音素への還元は一見魅力的だが、妥当

と言えない点が多々ある。Basbøll 自身もこの解釈に固執しているとは思われない (Basbøll 1985 参照)。

この還元説の妥当性を検討してみる。synd - syndig と同様に、〈nd〉の〈d〉が [d] となる語として fyndig (←fynd), yndig (←ynde), kyndig, myndig がある。これらの語には /d/ を設定できよう。しかしながら、その他の〈ynd〉の語は〈d〉が [d] となる、すなわち音節末 /d/ があると証明できる派生形などをもたない。(5)の skynd は skynde の命令形である。不定詞 skynde の音節境界は /d/ が無音であるので、skynd+e となるはずである。しかしながら、この skynde ばかりではなく、その他の § 2.2 (7-4) で示した dynd, tynd, begynde, (be)synderlig, flynder, hynde, mynde, plyndre の〈d〉が /d/ であると証明できる派生形はない。さらには bønder [bön'ɔ] のように [ø] ではなく、[ö] が現れる語もあるが、これは果たして /bYnnɔr/ のようになるのだろうか。これらの語の〈d〉は音素としては存在しないと考えるべきであろう。Basbøll は後の論文 (1985: 15) で、このような場合に /d/ を設定するのは ad hoc であると言っている。/d/ が存在しないとすると、原音素還元説は成立しない。なぜなら、これらの (skynde 以下の) 語の音節末子音は鼻子音のみとなるからである。

nynne [nønə], krymmel [kröm'əl] ([ö]=R[ö]) の音節境界を ny+nne, kry+mmel とはできない。というのは、開音節の〈y〉/y/ は [y] となるからである。したがって、両語の音節境界は nynn+e, krymm+el となる。また、krymmel は stød をもつが、音節頭子音に stød が起こることはないので、この [m] は音節末に起こっていることの証明になる。これらの語では鼻子音の後に非鼻子音がないのにもかかわらず、[ø] (/R[ö]) が現れていることになる。この場合の〈nn〉、〈mm〉は音韻的には各々 /n/, /m/ の単一子音と筆者は解釈するが、たとえ同一重子音 /nn/, /mm/ と解釈しても、問題

の [ø] の生起の根拠とはならない。拙論（間瀬 1976）でも stød 派生のために同一重子音を設定したが、筆者は現在ではこの考えを放棄している。Basbøll 1985: 15 が言うように、stød を導くために音節末同一重子音を設定するのは音声的同一重子音がないので根拠薄弱である。Stød は語彙的に指定しておくのが適切であろう。（デ語ではスウェーデン語やノルウェー語のように、短母音後の音節末に必ず子音が 2 個（以上）くるといような規則を設定できないことは拙論（前掲）で述べた通りである。）

このように考えると、dynd, dønne, tønne, tynde とか mynde, mønt, mønte などではすべて [ø] をもつが、これらの語では第 1 鼻子音後の子音の数や種類とは関係がないことがわかる。pønse, ønske は [ø] をもつが, hønse, hønse は [ö] をもつ。原音素 1 個の解釈によれば, hønse, hønse は <n> を重子音 /nn/ にすれば [ö] を導くことができることになろうが、上述のように、これには音声的・音韻的根拠はないものと思われる。

以上の理由で、前舌円唇短母音を音節末鼻子音の前で 1 個の音素 /Y/ に還元することは妥当ではないと考える。§ 2.2 の (7-4) の語彙における “yngre”, “unge” の話者の発音の傾向を加えると、この説の妥当性はさらに減少する。非鼻子音環境で 2 個の前舌円唇短母音を認めなくてはならないことは確かであるので、鼻子音環境でも最低 2 個の音素を認めてよいと思われる。

3.3. 鼻子音環境の短母音の音韻解釈

§ 3.2 の還元説が妥当でないとすると、前舌円唇短母音の [y], [ø], [ö] の 3 個の音声形は 2 個の音素から、あるいは 3 個の音素から派生したものかが問題となる。そこで、「短母音 + 鼻子音」全体に戻って検討してみることとする。

§ 3.1 で示したように、[i], [y], [u] の語がわずかしかない

という事実は、これらを「例外」として扱うことを認めるのに十分説得力があると思われる。たしかに、前舌母音 [i], [y] をもつ語の大部分は外来語であるが、後舌 [u] の語は、Rischel 1969: 182 が言うように、「わずかしかないが、すべて頻度の高い日常語である」という事実はある。しかしながら、“R__X” 環境には [u] が現れるのに対し、“R__N” には [u] が現れないことは “X__N” の [u] が「例外」であることを十分に示唆しているものと思われる。

§ 3.1 の解釈 A の問題点は /i/ と /y/ の変異音として、例外を含め、各々 [i, e, æ], [u, ø, ö] の 3 個を認めなくてはならないことである。たとえば

[i]	linje	trin	[y]	hymne	brynje
[e]	linde		[ø]	hynde	
[æ]		trimme	[ö]		brynde

Thorsen & Thorsen 1986: 139, 22 は解釈 B に近い考えをしているが、これはデ語音声学の入門書であるためでもあろう。しかし、その場合でも ±R 環境の設定は必要であるので、「例外」を例外としないだけで、その他の点では解釈 A と変わらない。結論として、やはり解釈 A の方が優れていると思われる。

解釈 A を採ると、鼻子音環境の [i, y, u] は各々 /i, y, u/ の「例外的」発音形となり、その主発音形は [e], [ø], [å] ということになる。そして、前舌非円唇短母音では /e/ と /æ/ が、後舌短母音では /o/ と /å/ が中和し、各々 /e/, /o/ となり、/æ/, /å/ は鼻子音環境には現れないことになる。前舌円唇短母音は鼻子音環境以外と同様に 2 個の音素を設定すれば十分で、両者の間に中和は起こらない。

ところで、字母 <e, ø, o> が各々（標準環境で）[e, ø, å] になる場合、これらは正音学的には例外となるが、音韻的には例外とはならない。というのは、[e, ø, å] は各々 /i, y, u/ の発音形と

解釈するからである．たとえば hende [henə]←/hinə/, end [en]←/in/ ([æn]←/en/), mønt [møn'd]←/myn't/, bom [bām']←/bum'/, ond [ån']←/un'/.

残りの「例外」は §1.2 (3c) で示した gymnastik, symbol など外来語に現れる [y] である．[y] をもつ語を2種に下位分類してみる．

(i) gymnastik [gymna'sdig], synagoge [syna'go:wə], etc.

(ii) 弱強勢の sym-, syn- に始まる語:

sym'bo'l, symfo'ni', symme'tri', sympa'ti', sym'po'sion,
sym'po'sium, symp'to'm, syndi'ka't, syn'dro'm, syn'kope,
synkre'tisme, syn'kro'n, syn'taks, syn'tese, etc., etc.

'synthesizer は例外的に語頭の syn- の音節に強勢がある．syn-dikat は MH では [syndi'ká'd] であるが、SD では [søn-] とする．[søn-] だとすると、「例外」の「例外」となる．

(i) の型の語はわずかしかないと思われる．synagoge は sy+na+gog+e のように音韻的音節を区分するのが適切であると解釈できるので、例外とはならない．なお、olympi'ade, o'lympisk の〈y〉は強勢の位置に関係なく、正常の [ø] である．(ii) は外来語形の語頭の弱強勢の sym-, syn- として語彙規則内で処理できると思われる．(i) の gym- も同様な処理が可能であろう．

4. 終わりに

上述の音韻解釈は大筋において、Martinet 1937, Spang-Hanssen 1949 を始め、従来から行われてきたものであるが、本論では現代の発音形に基づき、変異音の分布をその生起頻度から再検討したものである．

表1に示した非鼻子音環境における短母音の分布と照合してみると、鼻子音環境において [i, y, u] をもつ語形の生起頻度が非常に

低いことから、音韻的には「例外」として扱うことが妥当である。発音辞典の記述を見ると、広口化の傾向は増大しているが、「例外」の数は増していない。したがって、今後は「例外」の語の実現形の変化（広口化）の傾向は増大しても、「例外」となる語数は増加しないと予想される。同時に、変異音の広口化も予想されるが、音韻的には広口化はほぼ完了していると結論付けることができよう。

前舌円唇短母音の鼻子音環境における諸変異形を1個の音素から派生させるという考えは妥当ではないことを検討したが、上述の広口化の傾向を見ても、原音素還元説は妥当ではないことがわかる。

正音学的には「例外」となる $\langle e \rangle = [e]$, $\langle \emptyset \rangle = [\emptyset]$, $\langle o \rangle = [\text{å}]$ は音韻的には例外とはならない。このように、音韻論と正音学とでは音声形の扱い方に相違があるのは当然であろうが、だからと言って、正音学で音節境界や子音字の結合可能性を無視してよいということにはならない。

以上のように、母音(字)と音声記号のずれは、語学教育の見地からは歓迎されないものではあるが、音素と音声形の関係は、音環境を指定することによって十分説明できる。(31/7-91)

*Short Vowel before Nasal Consonant
in Present-Day Danish*

Hideo Mase

Summary

Danish short vowels have incessantly undergone phonetic opening-processes. This is especially conspicuous for the vowels before a syllable-final nasal, which is clearly seen in the data

of Becker-Christensen (see Table 1 (p.140)). But his data have some ambiguity, so that we examined his data by the aid of two pronunciation dictionaries: Molbæk Hansen (1990) and Brink *et al.* (1991). The result is shown in Table 3 (p.149) and the wordlist 7.1-7.5 (p.147-148).

Based on the reexamined data, we can say that the present phonological status is as follows. Since [i], [y], [u] occur rarely before a syllable-final nasal, the main allophones of /i/, /y/, /u/ in this environment are in Dania [e], [ø], [å] respectively. This change of phonetic values of allophones brings the neutralization between /e/ and /æ/, and /o/ and /å/ in this environment, thus reduction of phonological oppositions to /i/, /e/, /y/, /ø/, /u/, /o/, whose main allophones are [e], [æ], [ø], [ö], [å], [o] respectively. We can say that the phonological opening of short vowels in the nasal environment is now on the final stage, while phonetic opening-processes will continue.

We discussed also a possibility of reducing front round vowel phonemes to one single phoneme proposed by Hjelmslev (1951) and Basbøll (1971; 1972)). The proposal seems to be untenable, because, as Basbøll (1985) says, there is no phonetic evidence for the insertion of hypothetic oral-dental or nasal phonemes. In addition continuous phonetic changes will disprove the hypothetic phonological conditions.

参 考 文 献

(外国文献の発行地は特記のないかぎり København)

- Basbøll, Hans. 1971. "A commentary on Hjelmslev's Outline of the Danish Expression System (I)", *Acta Linguistica Hafniensia*, Vol. XIII, No. 2, 173-211.

- Basbøll, Hans. 1972a. "Some remarks concerning the stød in a generative grammar of Danish", *Derivational Processes* (= KVAL Research Group for Quantitative Linguistics) PM Ref. No. 729, 5-30.
- . 1972b. "Some conditioning phonological factors for the pronunciation of short vowels in Danish with special reference to syllabification", *ARIPUC* (= *Annual Report of the Institute of Phonetics University of Copenhagen*), Vol. 6, 185-210.
- . 1985. "Stød in Modern Danish", *Folia Linguistica* Tomus XIX/1-2, 1-50.
- Becker-Christensen, Christian. 1988. *Bogstav og Lyd*. Bind 1.
- Hansen, Aage. 1962. *Den lydlige udvikling i dansk. Fra ca. 1300 til nutiden*. I. *Vokalismen*.
- Hjelmlev, Louis. 1951. "Grundtræk af det danske udtrykssystem med særligt henblik paa stødet", *Selskab for nordisk Filologi. Aarsberetning for 1948-49-50*, 12-24.
- Martinet, André. 1937. "La phonologie du mot en danois". *Bulletin de la Société Linguistique de Paris* tome 38, Paris, 169-266.
- Rischel, Jørgen. 1969. "Notes on the Danish Vowel Pattern", *ARIPUC* Vol. 3, 177-205.
- Spang-Hanssen, Henning. 1949. "On the Simplicity of Description", *Recherches Structurales = Travaux du Cercle Linguistique de Copenhagen* Vol. V, 61-70.
- Thorsen, Nina & Thorsen, Oluf. 1986. *Fonetik for sprogstuderende*. 3. reviderede udgave, 8. oplag.
- 間瀬英夫. 1976. 「デンマーク語の長・短母音 — 母音音長は後続子音の数から予測できるか — 」, *Idun* III, 3-34.
- . 1990. 「Peter Molbæk Hansen 著『デンマーク語発音辞典』について」, *Idun* IX, 93-126.

発音辞典

- Brink, Lars *et al.* 1991. *Den Store Danske Udtaleordbog*.
- Hansen, Peter Molbæk. 1990. *Udtaleordbog*.